
汚泥の花

鹿目 鹿子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

汚泥の花

【Nコード】

N6998V

【作者名】

鹿目 鹿子

【あらすじ】

世の中は理不尽だ。どうして私だったのか、まるでわからないし、きつと理由なんてない。

——魔術師の気紛れで異世界によばれた少女のどこか淡々とした歪みと、どこかの国の王子（8歳）のおはなし。携帯サイトでも、もそもそ書いてます。

1話

理不尽だ。

なぜ私だったのか、なぜ此处だったのか。

きっと理由なんてない。

私はひとりの魔術師の気紛れによつて、ここに喚ばれた。そいつは自らを宮廷魔術師と名乗り、私を喚び出したのは自分だと何の感慨もなく告げた。何を馬鹿げたことを……と失笑したのを覚えている。

しかしそいつは、私の様子を齒牙にもかけず淡々と、お前を還すことは不可能だと言う。

私は帰れたかった。不安で、怖くて、心細かった。目の前にいる魔術師は、どんな感情を抱いているのか分からなかったし、私を喚び出した張本人だという。私は決して信用してはならない人物として魔術師を覚えた。それすら魔術師に見抜かれていたのだろうか。魔術師は長いローブを翻した。

「お前を一人で生きていけるようにしてやろう。さあ、来い」

私に拒否権はなかった。ただ何かにそうされたかのように、魔術師のあとをふらふらと追った。

きつとその時の私は頭が働いていなかったに違いない。もしかしたら魔術師が何か術をかけたのかもしれない。ただ、その時の私に選択する余地など一つたりとも残されていなかったことだけが事実

だった。

それからの毎日は兎に角、過酷だった。ひたすら魔術を習い、練習し、たまに思い出したかのように食事を摂り、気絶するように眠り、起きたらまたその繰り返し。それが何年も続き、魔術師のことを先生と呼ぶのに慣れた頃、そいつは私を王立の魔術学院に入れると言い出した。

王立魔術学院といえば魔術師の名門で、王国中から志願者が殺到して倍率は年々上がっていつている……らしい。お喋りな魔術師の侍女が教えてくれた。

どうせ学校に通うなら元の世界に戻してほしいと思ったが、そういえばどうせ魔術師に「それは出来ない」「それは不可能だ」と言われるだろう。

考えるだけ無駄なことだ。

それに、私だって伊達に何年も魔術について学んできたわけではない。魔術師が帰してくれないなら、自力で帰ってやるというしか思い始めた。

そう思ってから死に物狂いで書を読み漁り、実技を魔術師相手にこなし、兎に角手当たり次第に魔具を試す。そんな毎日を過ごした。

おかげで私は気付いてしまった。魔術師が私を『喚ぶ』ために行った魔術は、難解を極めた上に幸運が重ならなければ行使できないものだということに。

それは、幾重にも重なる術の式を組み合わせ、魔力を最大まで練り上げ、そうした努力で何とかなるところまでして、あとはどの時

間軸のどんな人間が引つ掛かるか若しくは引つ掛からないか——すべて幸運任せ。私はそうした偶然に引き寄せられて此処にいるようだった。

当然魔術師の先生は幸運を呼ぶ魔具を所持して儀式を行っただろうから、多少大目に見たとしても、なんて私の運のないことか。なんて魔術師の悪運の強いことか。

私はやはり被害者だった。

2 話

王立魔術学院はありとあらゆる年代の、ありとあらゆる立場の、ありとあらゆる人種が集っていた。魔術師に学校見学だと言われ連れてこられたものの、まるで美術館や博物館に遊びに来たようにキョロキョロしてしまう。

——そういえば学校見学と言ったのは魔術師ではなく、お喋りな侍女だったか。

「どうだ、これがお前が通い住まう学舎だ。私も以前ここに通っていた」

魔術師は慣れた足取りで事務室らしき場所に進んでいく。今日は入学届けと魔術師の私に対する推薦状を届けに来ることが目的だ。

私と魔術師が用事もなく連れ立ってどこかに行こうなどとする筈がなかった。暇さえあればお互い書を読み魔術を深めている。――

私は帰還するため、魔術師は趣味で、だが。

「私は何年ここに通わなければなりませんか？」

魔術師は私の質問に首を傾げた。悩むような質問だったろうか？私がした質問は義務教育や高校、大学が何年程度のものなのかというものだったはずだ。私も首を傾げなくなる。

「お前ならば四年かからないだろう」

魔術師はやはり何の感情を見せないまま答えた。

魔術師は極端に感情を表に出さない。そもそも魔術師に感情はあ

るのかどうか、そこから疑問を持たなくてはならないのではないか。

「そうですか、分かりました」

まあ、何にしても私には関係のないことだ。そう思った途端、魔術師への興味は消え去った。元々ないに等しいものだったので無理もないだろう。

ソリュエシオン王国。アー大陸の南西に位置する王国で、近年他国の追隨を許さない勢いで数多の国々を席巻している強国。

この国の強さの理由であり、最も重要視されるのが魔術師——魔術だ。

だからこそその学院のこの設備であり、厚待遇だ。有力な魔術師は凡そ王命により宮廷魔術師にされる。それが王国の力であり、この国の魔術師の使命。

バカらしい。

どうして私が私を思いやらないこの世界に使命を今日享けなければいけないのか。神様とやらがいるのなら、どうしてこの世界に来てから何年も帰りがついている私に手を差し伸ばしてくれないのか。

もしも魔術師が起こした儀式をもう一度して、魔術が発動されたとしても私が元の世界の同じ時間軸の同じ国に生きて戻れる可能性なんて、考えたくないくらい低い。可能性が0じゃないってただだ。

まったく方法が分からないわけじゃない。まったく可能性がないわけじゃない。それがまた辛くて悔しい。

一体どれだけ私を馬鹿にすれば気が済むんだ、この世界は。

用事を済ませて学院を出る。

ふと振り返ると、神殿のような学院がそびえ立っている。目に痛いまでの白さが憎たらしかった。

こんな所を母校だなんて決して言えないだろうと確信した。

3話

誰にも邪魔されずに扉を抜ける。

この重厚な扉は城だけでなく、私の腕のなかに抱かれているいけない子供も守っていたのだろう。

今しがた出たばかりの扉の後方からは怒声が飛び交う。

何てこの子は愛されていたのだろうか。思えば思うほど憎たらしさが増していく。

私は今日、誘拐犯になった。

王立魔術学院を首席で卒業した私は当然のように王宮付きの魔術師になった。

王宮付き魔術師が身に纏う純白のローブを渡されたとき、私は座り込んでもう二度と立ち上がりたくないと思った。この国のために使う力なんか私のなかにはないと喚きたかった。

だけれど、そんなみつともない真似を敵ばかりのこの世界でどうして出来ようか。

私は意地でその純白の鎖を受け取り、笑みをつくってみせた。まわりは次世代の魔術の担い手だと私褒め称えるばかりで、内心には気づいた素振りをみせない。

魔術師はいつもの感情の読めない顔で、わたしが受取ったものと同じ純白のローブを身につけていた。

魔術師のローブを様々な功績を称えるチャームが彩っている。へ

ドが出る思いでそのチャームを見つていた。

それからというもの、私の生活拠点は魔術師の家から王宮の魔術師たちの棟へと移った。

魔術師と功績も背景もまるで違うわたしが魔術師の隣の部屋になったと聞き、もしかして気を遣ってくれたのかと思うと、何とも面映ゆかった。

人との関わりを極力避け、ひたすら研究に没頭するには魔術棟は非常に向いていた。書庫も研究施設も生きた賢者達も、少し足を伸ばせばそこにいる。

気が付けば一年が経とうとしていた。

しかし、人との関わりを極力避けると言っても私の立場は、いわばその年のルーキー。だからか、王族のプライベートな催しや警護などに呼ばれることは多くあった。この世界の人と関わることは好きではなかったが、仕事となればきちんとこなしたいと思う。故に召集を拒否したことは一度もなかった。

ただそのような時、どうしても第四王子に気がいつてしまう。

齢7歳の少年だ。恋だとかいうつもりは毛頭ない。

けれど彼に向けられる周囲の期待や称賛、慈しみ……愛しさを詰め込んだ眼差しを一心に受け、当たり前のようにそれを受け入れる彼が憎かった。その上、幾つもの他に比類ない才能を花開かせる。

彼のせいではない、そう理解はできるものの、妬む心は止められ

なかった。理不尽だと思わずにはいられなかった。——無防備な少年に何度呪いを放とうとしたことが。

そして、一年が過ぎたこの日。

私は件の第四王子の寝室の警護を何人かの同僚と共に受け持っていた。

時刻は深夜。ふと王子の部屋に立ち入り様子を窺うと、窓から注がれる月の光に照らされて、安らかに眠る王子が寝台に浮かび上がる。

神に愛されるのも納得できる容貌だ。

——そうだ。

私は月を見上げた。この世界が私に理不尽を強要するのなら、私もこの世界に理不尽なことを起こしてやろう。研究は随分進んだ。この世界にきて7年になる。もうあの頃の無力な私ではない。

——憎たらしい君に、私がこの世界で一番に貰ったものをあげよう。

頭のしたに手を差し込み、ゆっくりと身を起こさせると尻を片手で支え抱き抱える。

白いローブを羽織り王子の姿と私の王子を抱える腕だけ見えなくなるように魔術をかける。

外は夜の空気で満ちていた。

この大陸の中どこか遠くに行こうと思い、深く考えずに転移をする。逃げれる限り逃げ切ってやる。

理不尽は今夜起こった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6998v/>

汚泥の花

2011年8月31日07時39分発行